

山王まつり



六・ 日吉山王まつり

日吉新宮（日吉神社）と火祭り

日吉神社の起源については、大正二年（一九一三年）二月一日神戸町村社日吉神社の縣社昇格を、氏子総代等から内務大臣原敬に請願した文中に、「当日吉神社ハ、人皇五二代嵯峨天皇ノ御宇弘仁八丁酉年傳教大師ノ御創建ニ係ルモノニシテ、即チ同年大師ガ聖勅ヲ奉シテ東国御親教ノ砌、当国ニ御巡錫アリシヲ以テ、本郡ノ郡司安八大夫安次ハ大師ノ碩德智識ヲ信仰ノ餘リ、一字ノ道場ヲ創建ス、即チ今ノ善学院（神護寺）之レナリ、當時大師本院ニ於テ三密ノ秘法ヲ御修行アリシ際、今ノ比叡山官幣大社日吉神社影向託宣シ給ヒシヲ以テ、大師ハ歡喜ノ餘リ、自ラ誠心誠意ヲ籠メテ大宮・二宮・聖眞子・十禪師ノ四柱ノ御神実ヲ御彫刻アリテ、永ク国家鎮護ノ守リトハ爲シ給ヘリ、之レヲ以テ善学院ヲ影向山神護寺ト称セリ、其後、人皇五十六代清和天皇ノ御宇貞観二庚辰年、慈覺大師ガ故傳教大師ノ御遺跡ヲ慕ヒ、態々当地ニ御来杖ノ上、開祖大師ノ御遺跡ヲ修補シ、且新タニ八王子宮・客人宮・三之宮三柱ノ神実ヲ彫刻シ給ヒテ、比叡山ト同一神社トセラレキ」と記している。

山王まつりの起源について古記録に、『山王祭礼の神輿は後三條院延久三年（一〇七一年）四月申の日を以て比叡山坂本の吉例に準じて神輿を行幸し奉候』とある。当時の神輿の規模、その他、祭事の次第等について知ることができないが凡そ九百年余前、神輿が祭事に使用されたことを物語っている。現在の神輿は、貞享四年（一六八七年）に造立され、幾度かの修理を経て現在に至っている。祭式についても、この貞享四年に従来乱れがちになっていた祭次第を改め『日吉山王権現御祭の次第』が定められた。この祭次第は、以後明治になって太陽暦が採用されたことにより日にちが変わったこと、平成七年に五月に移動したこと以外は、大変革されることなく受け継がれ現在に至っている。



神輿出し



五月一日、本町、横町、上新町、三津屋、宮町、下新町、鍛冶屋町の七町内の神輿蔵に保管されている神輿が、一年振りに蔵から出され日吉神社境内にある拝殿（神輿殿）へと運ばれる。蔵の中の神輿は、全ての装飾を外された、いわゆる裸神輿の状態である。

過去に於いては、裸神輿のまま、拝殿まで担いで運んだが、現在は事前に、御帳、神鏡、水引、鈴縄、鈴を付けた渡御時の状態にした。から運ぶ様にもなった。



拝殿到着後は、七基の神輿が行われる。これまで間口三十五尺の拝殿に神輿七基が並ぶため、狭くて調整を要するためであるが、平成二十七年に改築され、広くなったのでその必要はなくなった。

鳳凰、櫻路、鳥居、高欄、雪洞（前後）を装飾し、神輿前には御神酒が並ぶ。また下馬立が置かれ、提灯には宮名が記されている。この何宮の神輿かが判る。この状態になる頃には、各区の警固が昼夜交代で神輿の警備に当たる。朝渡御後は、御旅所での警備となる。五月二日午前零時頃に暗闇の中、神遷し神事が行われる。神々は、神輿後面の御帳を開けて入っていた。



各社殿の前には、日吉大宮御神前、日吉大明神と書かれた大旗や御燈が立ち並び、各社の境内にも所狭しの感が漂う。大旗は、町内各区の道路にも立てられる。境内と同様な幟もあれば、漢詩が書かれた幟もあり、郷土の書家杉山三郊の書もある。

境内の大宮本殿では、左三巴紋の幕を張り提灯が並ぶ。浜床と階段には祭布が敷かれ、祭主報告祭、社参の準備が整えられる。境内にある大宮以外の各社殿と庄九郎川畔の唐崎神社もこれに準じて飾るが、社殿の規模に合せて装飾となっている。



渡御で渡る庄九郎川には水が張られ、水量は大警固区が管理する。唐崎神社は、この河畔の西側に建てられており横には唐崎の松が植えられている。石の大鳥居には、御神燈と書かれた大提灯が掛けられる。文字の横には、三つ葉葵の紋が描かれている。庄九郎川は、過去には山王川と呼ばれており、五条橋が架かっている。

惣門から御手洗までの参道脇には、下馬立ての宮名提灯には、日吉大宮などの宮名や神紋、各区分の文字が描かれている。

祭主報告祭



五月一日午後八時に祭主報告祭が始まる。日吉神社社務所には力紙が安置され、祭主が上座に座り氏子会役員六名がその両脇に着座する。祭主は、ここで氏子総代の挨拶を受ける。挨拶を終えた氏子総代は、部屋の両側に着座して待機する。八時になると宮司が迎えに来て、宮司の先導で大宮本殿に向かう。社務所を出て、神職を先頭に参道を進み、神輿殿前で一旦止まって神輿に対し一礼する。



神職と祭主は、大宮本殿へ昇殿し日吉大神に対し祭主として選任されたことを報告する神事が行われる。祭主は、玉串奉奠後御神酒を頂く。

次いで大宮本殿前に待機していた氏子総代も御神酒を頂き、神職を先頭に社務所へ戻る。社務所前にて祭主区代表がお礼の挨拶を述べると祭主報告祭は終わる。

試樂参り



七時に石原傳兵衛氏が大宮本殿へ昇殿参拝される。石原傳兵衛氏は、最澄と協力して近江国坂本の日吉神社（現山王総本宮）に大社から神戸の地に神々の勧請に関わった八太夫安次の裔である。

五月三日午後六時に、影向山神護寺善学院へ印が参拝し、殿前にて読経が行われる。読経が合の残を留め、ある。貴重な神事で



午後八時になると祭礼事務所を出て、松明に照らされ、先導の世話人に続いて祭主と氏子総代の行列が、日吉神社へ向かって出発する。

午後七時頃より本町に設営された祭礼事務所では、祭主が床几に腰掛け、氏子総代の挨拶（謹んでお供させていただきます）を受け、高き舞台の上の席で、祭主の両側で床几に腰掛け、氏子の両側で床几に腰掛け、祭礼事務所前にて「ハ」の字形に配置された床几に腰掛け、警護に当たる。



祭主報告祭同様、拝殿前で神輿に一礼してから大宮本殿へ進み、祭主のみ大刀を腰から抜き手で持って昇殿する。玉串奉奠後に御神酒を頂く。
大宮本殿前に待機していた氏子総代も御神酒を頂いた後は、再び往路と同じ行列を立てて祭礼事務所へ戻る。

祭主は袴に帯刀、氏子総代は羽織・袴に馬上提灯姿である。



祭礼事務所に到着すると、祭主区代表の御礼挨拶があり、祭主報告祭が終わる。

Two ornate, traditional Chinese ceremonial chairs, possibly for deities or royalty, are displayed side-by-side. The chairs feature intricate carvings, red and gold decorative elements, and are set against a dark background. They are positioned on a red carpet.



五月三日午後九時三〇分
になると、神輿殿に飾られ
ていた神輿は、鳳凰ほうおう、瓔珞ようらく、
鳥居、高欄こうらん、雪洞ばんぼりなどの装
飾品が外され、渡御時の姿
になる。

午後十時には、安次、丈六道、田村、本庄の四ヶ村の若衆に担がれた竹松明が神輿殿後ろに運び込まれ、威勢良く燃やされる。



同じく午後十時頃、本町の祭礼事務所では試楽参り同様、祭主が床几に腰掛け、氏子総代の挨拶（謹んでお供させていただきます）を受ける。祭主と執行役員は、一段高い舞台の上の席で、祭主の後方には松飾りが置かれてゐる大警固用の大鎧は、警護武者として着用し祭礼事務所前で警固に当たつてゐるのでここには無い。氏子会理事の十名は、土間の両側、その他の氏子総代は祭礼事務所前で床几に腰掛けて待機してゐる。

午後十一時に祭礼事務所を出発した警護武者は、道中の確認をしながら日吉神社に到着すると、神饌所前にて警備に当たりつつ祭主の到着を待つ。



時務
十五口
分所
頃上
となを
る受
た祭
のは主
午後祭
十一礼
一事

午後十一時に日吉神社拝殿にて、担ぎ手が揃ったことを確認した本町警固が、祭礼事務所まで走り祭主に対し、お迎えに来たことを告げる。



祭主の到着前には、拝殿の神輿に対し神職の祝詞奏上が行われる。祭主到着のタイミングを見計らって行われるが、祭主行列の速度が一定しておらず、難しい一面がある。

祭主行列の前には、数百本の護衛松明が焚かれ、護衛人、箱提灯、錫杖、高張提灯が続き、その直後を祭主がゆっくりと日吉神社へと進む。祭主の直後には、持ちが続き、その後方には、氏子総代が馬上提灯を持って続く。この行列は四、五十分掛かるので、護衛松明は一本では持たないので途中で二本目、三本目が投入されることになる。



祭主が、牛尾宮神輿前に
て深々と一礼すると周囲か
ら歓声が上がリ、神輿渡御
が始まる。
この頃には、午前零時を
過ぎており、日付が変わっ
て五月四日となっている。



拝殿前まで来ると、祭主
は護衛人に護られながら牛
尾宮神輿へと進む。



祭主は、牛尾宮神輿への
一礼後武者の中央にて床几
に腰掛け、神輿が発する
度に起立し、礼をする。祭
主の直後には、槍持ち、警
護人が控えている。
渡御終了後は、往路と同
じく行列を立てて祭礼事務
所まで戻り、祭主区代表の
挨拶があり、それが終わる
と朝渡御が終了する。



神輿渡御の順は、牛尾宮、
樹下宮、大宮、二宮、宇佐
宮、客人宮、三宮と決まっ
ていて変わることはない。

本楽祭



参道を進み、三重塔前の
被所にて浄めた後拝殿へ上
がる。

五月四日午前十時三十分
に本楽祭が行われる。社務
所前にて行列を整えてから
参道を北上する。
手前より、祭主、石原傳
兵衛氏、善学院法印。



還

献饌^{けんせん}は、氏子総代が並
で神饌所から大宮本殿まで
送る。
献幣^{けんぺい}使^しの奉幣^{ほうへい}、宮司^{みやうし}の祝^{のり}
詞^と奏^{そう}上^{じょう}、祭主^{さいしゅ}の祭文^{さいもん}、舞^{まい}、
玉串^{たまぐし}奉奠^{ほうてん}と続く。
本楽祭が終了すると拝殿
の屋根に力紙^{ちからがみ}が飾られる。



御

所では、頃、本町の祭礼事務
床に腰掛け、氏子総代の松
搦を受ける。祭主は松
飾りの両側には、竹飾りと
祭主の置かれて、竹飾りと
松飾りが置かれて、竹飾りと
渡御様が、この状態で本町
警固のお迎えを待つことに
なる。お迎えが到着後、別
の伝令が社務所へ走り、石
原傳兵衛氏の行列出発を要
請する。

午後四時から、御旅所の
神輿の装飾外しが行われ、
朝渡御様に渡御時の姿で
還御を待つ。



御旅所前の棧敷までの距
離は、祭礼事務所からより
も社務所からの方が長い
で石原傳兵衛氏の行列が祭
主の行列より早く出発する
ことになる。

午後五時過ぎ、朝渡御同
様祭礼事務所前にて待機し
ていた八人の警護武者が、
日吉神社までの道中を確認
しながら進む。日吉神社到
着後は、朝渡御と同じ場所
で警護に当たる。



石原傳兵衛氏の行列が途中まで進むと、伝令が日の丸の旗を振って祭礼事務所の祭主に出発の合図を送る。ここで初めて祭主の行列が動き出す。先導は神職、これに指樽を担いだ少年、錫杖、松飾り、竹飾りが続き、祭主とその直後に槍持ち、更にその後方に氏子総代が続く。



棧敷に到着した祭主と石原傳兵衛氏は、先ず一礼しその後杯を交わす。最初に祭主、次に石原傳兵衛氏に指樽の御神酒が注がれる。



祭主と石原傳兵衛氏の杯事に合わせて、大鳥居、惣門、御手洗と中継しながら日の丸の旗にて力紙投下の合図が送られると神輿殿の上安置してあった力紙が投下され、神輿殿前に詰めかけた若衆によって争奪戦が行われる。

いち早く力紙を掴んだ若者が一気に参道を駆け抜け、御旅所の牛尾宮神輿へ力紙を投げるとこれを合図に牛尾宮神輿が出御する。



神輿渡御の順は、朝渡御と同じく牛尾宮、樹下宮、大宮、二宮、宇佐宮、客人宮、三宮と決まっています。変わることはない。

神輿は、大鳥居をくぐり、琵琶湖になぞらえた庄九郎川を渡り日吉神社拝殿へ向かう。渡御終了後祭主は、往路と同じく行列を整えて祭礼事務所まで戻り、祭主区代表の挨拶が終わると還御の終了となる。

日吉神社へ到着した神輿は、神職により神々が神輿から降りられる。その後、大警固区の神輿を先頭に各町内へ神輿が帰って行き、祭りが終わる。



千二百年祭頃の様子
牛尾宮

御届
朝渡り御出し肩左記の通り御届け申します
氏名
高橋英見
森大剛
小川祐輝
村瀬智之
高橋瞭斗
佐野仲介
中村友一
佐藤順幸
加納友和
佐野幸広
右拾名御届け致します
平成二十九年五月二日 本町警固
氏子総代御中

御届
朝渡り及び還御の祭主
御迎えの者御届け申します
老田康人
右御届け致します
平成二十九年五月二日
本町警固
氏子総代
御中

祭礼事務所への御届書



帰り神輿後の集合写真

朝渡り 出しより元宮 還御 総門より元宮	
小川 正① 三浦元雄① 高橋瞭斗③ 中村友一⑤ 加納友和④	(下新町) (下新町)
高橋英見③ 佐野仲介③ 佐藤順幸⑤ 佐野幸広④ 石原一幸④	森 大剛④
村瀬智之③ 山村博幸⑤ 宮川敏秋① 広瀬誠治④	

朝渡御出の肩

三宮



帰り神輿後の集合写真

且吉大宮 還御 五か村配置図

区分(該当年)	出し (御旅所)	梅川屋	松尾氏宅	惣門	元蓮華院⇒ 入れ(拝殿)
甲(平30・〇5)	安次⇒	上新町⇒	丈六道⇒	田⇒	本庄⇒
乙(平26・〇元)	上新町⇒	本庄⇒	安次⇒	丈六道⇒	田⇒
丙(平27・〇2)	本庄⇒	田⇒	上新町⇒	安次⇒	丈六道⇒
丁(平28・〇3)	田⇒	丈六道⇒	本庄⇒	上新町⇒	安次⇒
戊(平29・〇4)	丈六道⇒	安次⇒	田⇒	本庄⇒	上新町⇒



朝渡御 大宮

大宮



帰り神輿後の集合写真

客人宮



朝渡御 宇佐宮



朝渡御 日吉神社 警護武者

武者・宇佐宮



朝渡御 樹下宮



朝渡御 二宮

二宮・樹下宮